特　集

津波被害から街を守れ！江戸時代に建造された武ガ浜波除がスゴイ！

武ガ浜波除全景

近年、台風等による風水害が全国的に頻発し、下田市でも様々な被害が起きています。また、将来的に発生する可能性があるとされる南海トラフ地震などに備え、常日頃の防災対策は非常に重要です。下田市は海岸線が長いため昔から地震による津波の脅威に晒されてきました。

およそ400年前の江戸時代初期、それらの脅威から人々を守るため武ガ浜波除（下田認定まち遺産認定番号78、登録名「武ヶ浜波除と今村公勒功碑」※本紙P10参照）が建造されました。武ガ浜波除が造られた経緯や背景を探り、下田のまちなみがどのようにできたのか、そしてこの2つの下田まち遺産を未来につなげるためにどうしていけばよいのか考えてみませんか。

安政の大津波の時の下田湾の様子を描いた画
（「津波に襲われる下田湾（モジャイスキー画）」）
湾内の船が傾き、手前では海に流される町人たちが描写されている

安政の大津波の際に流れた船がぶつかってできた傷が
了仙寺の本堂に今もなお残っている

安政の大津波で町が崩壊!?下田は昔から水害が多かった

嘉永7年(1854)11月4日、マグニチュード8.4、遠州灘の御前崎沖、南海トラフに沿うプレート境界を震源とした大地震が発生しました。年号はまだ嘉永でしたが、年末に安政と改元されたので、「安政東海地震」と通称されます。地震直後の大津波によって下田町の全戸数 875 戸の内 841 戸が全壊流出して4戸のみが無事、人口3,851人の内死者99人という大変な被害を受けました。

ペリーが下田に来航してから約7か月後、そしてロシア使節プチャーチンが下田に滞在中に起きたこの災害により、武ガ浜波除もほぼ全壊してしまいましたが、日中の津波だったということもあり、町民や役人は裏山に逃れたため死者の数は少なく、当日の夜には米の炊き出しが始まったといわれます。当時、下田は開港場だったこともあり、幕府の手によって町は急速に復興し、武ガ浜波除も現在の姿のように復旧されました。

武ガ浜波除は安政東海地震だけではなく、江戸時代初期に建造されてから何度も水害等により破損し、修復を繰り返してその都度下田を守ってきています（P6年表参照）。下田にとって大切な武ガ浜波除にはどのような歴史があるのでしょうか。

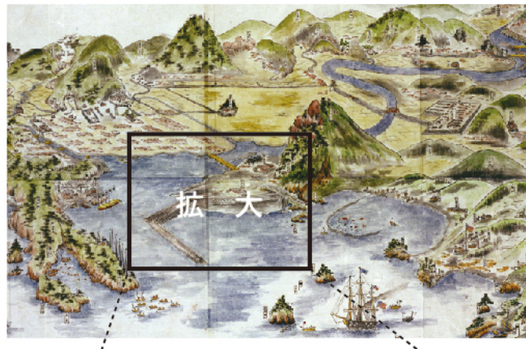
安政の大津波を今に伝える「津なみ塚」。下田市街の稲田寺の墓地にある

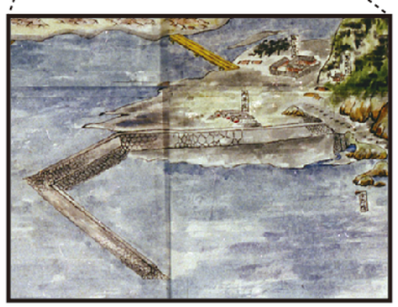
波除を作って町を守れ！自らの私財を投じた今村伝四郎の功績

武ガ浜波除は、大坂夏の陣から30年後の正保2年（1645）、二代目下田奉行今村伝四郎正長によって築き上げられた稲生沢川河口の堤防です。下田は徳川家康の江戸入府に伴い、防衛上重要な港として注目され、関所が設けられました。その後、泰平の世が訪れるとともに江戸と近畿地方を結ぶ経済的役割も担い、下田は大変な賑わいを見せました。下田は天然の良港ではありましたが、風浪から町を守るため、そして稲生沢川の流れを一定に保つため、今村伝四郎は武ガ浜波除と呼ばれる堤防築造に着手しました。その費用については、伝四郎が自分の給料を充てて波除を建築したといわれています。約2年をかけて築かれた当時の波除は直線で300間（約545m）その先直角に曲がって41間（約74m）という長さでした。この波除ができたことにより、多くの船舶が港に停泊できるようになり、風や波から下田の町が守られるようになりました。

今村伝四郎の功績によって下田の町が災害に遭うことは軽減され、発展し、現在に至るまちなみの原型が築き上げられました。

寝姿山から見た武ガ浜（写真中央）と市街地（写真右）




江戸時代後期の地図に武ガ浜波除が描かれている

今村伝四郎正長の肖像画（了仙寺蔵）

了仙寺にある今村伝四郎正長の墓

下田八幡神社例大祭は今村伝四郎によって始まった。

下田八幡神社の例大祭の見所である太鼓橋

毎年8月14日、15日に行われる、太鼓台の音色や太鼓橋が特徴的な下田を代表する祭典の一つ、下田八幡神社例大祭（太鼓祭り）は今村伝四郎が始めたとされています。今村伝四郎が下田奉行となったのは寛永4年（1627）。泰平の世が訪れたとはいえ長い戦国時代が終わったばかりで下田の町は殺伐とした雰囲気であったことに加え、地震や津波が続いたことによって下田の人々は疲れ切っていました。

その空気を振り払うため、意気高揚とまちの活性化を目的に下田八幡神社例大祭は始まったとされます。

太鼓の音色は大坂夏の陣で豊臣氏を下し、大阪城へ入城したときに奏でた陣太鼓の調べを取り入れたと伝えられています。

現在でも下田の人々が胸熱くなる下田八幡神社例大祭。今村伝四郎は精神面でも「下田らしさ」を作り上げた偉人といえるかもしれません。